

James Joyce 試論

—父と子の葛藤をめぐる—

吉津成久

James Joyce always said that there was only room for one novel in a man's heart (he hadn't even begun *Ulysses* then) and that when one writes more than one, it is always the same book under different disguises 1

この言葉は *Finnegans Wake* に至る James Joyce の全作品を考察する際の重要な指標となるものである。実に、Joyce は自己の全 *lifework* を 1 編の作品とみなしていたとあってよく、彼の創造の歴史はただ一つのこのくりかえしであり、一つの Pattern がそこに存在しているといつてよいであろう。その Pattern とは、“a family pattern” であり、maturity に達しようとする男子（息子）の、彼を取り巻き彼の成熟に嫉妬しそれを阻止せんとする者（象徴的に父と呼ばれる者）との相剋である。この “the father-son conflict” の pattern が自伝的な detail から universal なものにまで昇華されてゆくことこそ Joyce がとりくんだ *lifework* であるといつてよい。

この “the father-son conflict” は近代文学においては一つの Universal なテーマであつて、Huxley, Woolf, Lawrence, Hardy, Dostoyevsky 等々多くの作家がこのテーマの含む問題点ととりくんでいる。しかしながら、Joyce は同じ問題をとりあつかう他の作家と比べて非常にユニークな要素を持っている。彼は、この父と息子の葛藤の実際的な面、つまり detail よりもその principle をより深く追求する。父親そのものよりも、父性 (paternity) といったものに対する関心の度合が強い。そして彼の「父親」とは、彼自身と血のつながりのある、あるいは彼の経験世界に登場する具体的な父親像というよりは、むしろ a symbolic father の様相を帯びている。

例えば、Joyce 自身が愛読し、Joyce の *A Portrait of the Artist As a Young Man* (以下、*A Portrait* と省略) と共通のテーマを持つ Samuel Butler の *The Way of All Flesh* と *A Portrait* を比較してみると、Butler は、父親つまり

Theobald Pontifex の性格に強い関心を持ち、その残虐性、偽善、俗物的無感覚さというものが息子 Ernest Pontifex をいかにあわれな没個性的奴隷に至らせるかを細部にわたって描写している。しかし Joyce の場合は、Butler が detail において描写した父親像を父性 (Paternity) という理論面において展開させているようである。それは特に *Ulysses*, *Finnegans Wake* と後期の作品に移るにしたがって顕著になる。例えば *Ulysses* の “the library scene” で展開される次の父性論は Butler が Theobald Pontifex-Ernest Pontifex 間の “a father-son conflict” を detail の面で展開したものを理論的に定義づけた好例といえよう。

- A father, Stephen said, ... is a necessary evil... Fatherhood, in the sense of conscious begetting, is unknown to man. It is a mystical estate, an apostolic succession, from only begetter to only begotten... subjective and objective genitive, may be the only true thing in life. Paternity may be a legal fiction. Who is the father of any son that any son should love him or he any son?...

- They are sundered by a bodily shame so steadfast that the criminal annals of the world, stained with all other incests and bestialities hardly record its breach. Sons with mothers, sires with daughters, lesbian sisters, lovers that dare not speak their name, nephews with grandmothers, jailbirds with keyholes, queens with prize bulls. The son unborn mars beauty: born, he brings pain, divides affection, increases care. He is a male: His growth is his father's decline, his youth his father's envy, his friend his father's enemy...

- Sabellius, the African, subtlest heresiarch of all the beasts of the field, held that the Father was Himself His Own Son. The bulldog of Aquin, with whom no word shall be impossible, refutes him. Well: if the father who has not a son be not a father can the son who has not a father be a son? `When Rutlandbacon-southampton-shakespeare or another poet of the same name in the comedy of errors wrote he was not the father of his own son merely but, being no more a son, he was and felt himself the father of all his race, the father of his own grandfather, the father of his unborn grandson who, by the same token, never was born for nature, as Mr Magee understands her, abhors perfection. 2

ここに述べられている “father” と “son” は、Butler の Theobald Pontifex と Ernest Pontifex の場合のようにいわゆる real な父と子ではない。Joyce に

おける「父」とは、象徴的な父である。つまり、芸術家たる the son-artist としての Stephen Dedalus が圧迫を受けるのは、肉体的絆のある実の父 Simon Dedalus だけに限定されないということである。そこには a symbolic father という大きな体系が存在している。しかも Simon Dedalus は Theobald Pontifex のように肉体的かつ心理的な残虐性を全くといっていい程持ちあわせてはいない。これは Joyce と実父 John Stanislaus Joyce の真実の関係を反映している。父の死後間もなく書いた1932年1月17日附の手紙の中で Joyce は父のことを次のように述べている。

...the silliest man I ever knew and yet cruelly shrewd. He thought and talked of me up to his last breath. I was very fond of him always. 3

Joyce の弟 Stanislaus も Joyce は父が好きであったと述べ、幼児期における父の印象が Joyce の父に対する反抗心の導火線になったとする一般の批評家の意見を否定している。Stanislaus によれば、兄は一年の大半を学校で過ごし、たまの休日に家に帰っていたので、家では至極くつろいだ気分で父と接していたから、決して両者間に早くから悪感情は存在しなかったということである。彼らが激しく対立したのは唯一度で、それは Joyce が Nora という女性とあまりにも軽率に婚約し、それが Joyce の出世の障害になるのではないかと父が気づいた時であった。しかし数年後父は自分がその時とった態度について息子に男らしく謝ったということである。4

A Portrait において、Stephen Dedalus という the son-artist に対し肉体的あるいは精神的苦痛を与える者は、父 Simon Dedalus というよりは、Stephen の学友である Wells, Heron や Father Dolan, Cranly, Aunt Dante, Father Arnall 等である。これらの人物は Catholicism という体系への順応者であり、したがって、a father-son conflict が Joyce の作品の pattern であるならば、the son-artist である Stephen Dedalus を圧迫する者は、この Catholicism という体系を代表し、それを象徴する a symbolic father (or symbolic fathers) といえよう。

a father-son conflict の pattern の本質は、まずこの pattern を意義づけるために全作品に共通にあらわれる imagery を考察しなければ明確にすることはできない。Joyce 文学にあらわれる最も主要な imagery は数にして10数個しかなく、これは A Portrait の Chapter 1, Section 1 にすべて圧縮した形で紹介されている。この最も短い部分は、A Portrait のみならず Joyce の全作品への導入部であり、その文学解明への出発点である。ここに展開される各 imagery は A Portrait の各

章の中に、あるいは各章を細分した各部の中に、あるいは、他の作品の中に異った situation のもとであらわれて互いに関聯しあい、それを総合してみると実に深い意味をもって全体が構成されていることが明らかになってくる。つまり全体の中の imagery の調和 (harmony) と総合 (synthesis) によって Joyce 文学の本質が究明できるのである。

そこで *A Portrait* の冒頭のシーン、つまり Chapter 1, Section 1 を Stephen の情緒反応の分化にしたがって 5 段階に分け、そこにあらわれる主要な imagery を考察し、a father-son conflict の本質を考えてみたい。

[1] *A Portrait, Chapter 1, Section 1, line 1~6*

Once upon a time and a very good time it was there was a moocow coming down along the road and this moocow that was coming down along the road met a nicens little boy named baby tuckoo...

His father told him that story: his father looked at him through a glass: he had a hairy face. 5

この Section 1 には種々異った役割を背負った父親の imagery が紹介されている。そして父親の imagery に対立するものとして、母親に象徴される女性 (Catholicism の擁護者である Dante を徐く) の imagery がある。幼児期の Stephen の情緒は、後者に接する場合は、喜び、情愛、興奮といった快の情緒となり、前者は恐れ、不満といった不快の情緒をうみだす。この快の情緒と不快の情緒が交互に出現することは、*A Portrait* の、とくに前半に一種特異な rhythm をあたえている。冒頭の全く平和な moocow と tuckoo 坊や (Stephen の幼児期の愛称) の出会いの話は、快の情緒をうみ出す。突然それを語る毛むくじゃらの恐い父親の顔があらわれ、不快の情緒に一変する。ここで重要な imagery は息子の名前 “baby tuckoo” と父親の “a hairy face” である。未分化な幼児 Stephen の情緒が、周囲の人間に対する区別を持ち、はじめて分化されるのは、物語を語る “a hairy face” を持った父親に対した時である。一人の storyteller として、この父親は創造者 (a creator) である。 “a hairy face” をもったこの a creative father は *Finnegans Wake* の “the Lessens episode” の冒頭にも出現する。

With his broad
and hairy face,

to Ireland a
disgrace 6

“a hairy face”は息子にとって肉体的にも精神的にも成熟した成年男子の象徴であり、地上界における creative fathers をはじめ、唯一の Creator である父なる神の symbol mark である。the son-artist としての Stephen の lifework は、この父の持つ creativity に近づき、ついにこれを凌駕し、自ら creator たらんとする果しなき闘いである。それは自らを父であり子であらんとする Stephen の希求にもあらわれている。(Stephen=Christ の pattern については、梅光女学院大学英語英文学会発行「英文学研究第1号」掲載の拙論『Ulysses に関する一考察—魂の父・子を求めて』および「英文学研究第3号」に掲載の拙論『Water にまつわる夢の象徴—Ulysses に関する一考察その2』に詳しく述べてある。)

このような点から考えると、Joyce の “a father-son conflict” は息子 Stephen Dedalus と父 Simon Dedalus との葛藤というよりは芸術家たる息子 Stephen と宗教家たる父 (Simon Dedalus を含めて Catholic Fathers や他のアイルランドの creative fathers, ひいては父なる神 the Creator) の間の葛藤であるともいえよう。またさらには、芸術対宗教、肉対霊という問題に発展してゆくのではあるまいか。

Ulysses において Stephen は様々な場面で創造の業を試みるが、いずれもみじめな失敗に終わってしまう。浜辺で彼が創作した詩は、無意識のうちに Douglas Hyde から借用していたものであり、即興的に作った epigram も Augustine から引用したものであり、友人 Mulligan への電文は Meredith から借用したものである。いずれの場合も、息子には創造の力がない。父のみが創造できる。

“a hairy face”が a creative father の symbol であるのに対し、“baby tuckoo”はそれと対立する存在をあらわしているようである。“baby tuckoo”は、批評家によると、招かれざる愛の巣への侵入者である “a cuckoo” を暗示している。

As the very first sentence of *A Portrait* informs us, he is not truly of the family into which he was born—there he is ‘baby tuckoo’ the cuckoo’s fledgling in the cowbird’s nest. 7

A Portrait において Stephen の父は彼の存在に対しあからさまには怒りをあらわしていない。しかし引用2にあるごとく、*Ulysses* では父という者は、息子という人格の中に自分の地位を破壊する兆があることをただひび見てとっている。*Ulysses* で Bloom は父たる者が息子に対し無意識のうちに怒りをおぼえるものであることをお

ぼろげながら感じている。

Frightening them [children] with masks too. Throwing them
up in the air to catch them. I'll murder you. Is it only half
fun? 8

この後 Bloom は Stephen を失った息子の身代りとしてやさしく介抱し、Stephen
が独立した創造者にならない様に熱心に説得するが、Stephen は自己の発展が妨げ
られることを拒否する。

[2] *A Portrait, Chapter 1, Section 1, line 7~12*

He was baby tuckoo. The moocow came down the road
where Betty Byrne lived: she sold lemon platt.

O, the wild rose blossoms

On the liittle green place.

He sang that song. That was his song.

O, the green wothe botheth. 9

恐しい “a hairy face” をもった父の出現によって不快の情緒に陥っていた Stephen
はつづいて緑の野原に咲く赤バラを歌った文句によって快の情緒をとりもどす。ここ
で重要な imagery は “red rose” に対する “green rose” である。「緑の地に咲
く赤い野バラ」という父が創造した reality に対し、Stephen は「緑の野バラ」を
歌うことによって彼自身の imagination の世界を create しようとしている。

“That was his song.” という箇所には the son-artist としての Stephen の創造
の喜びが、また彼の a creative father に対する対抗意識がみられる。また Joyce
の全作品、特に最後の *Finnegans Wake* が、音韻にもとづく言葉の創造に注がれて
いることから判断して、ここにも音韻による言葉の analogy が考えられる。

“*O, the green wothe botheth.*” は単に舌のよくまわらない幼児の言葉として受け
とられるばかりでなく、音韻から “*O, the green was possessed.*” と解釈できな
いであろうか？ アイルランドの creative fathers が創造し、また彼らによって
牛耳られている芸術的風土が古色蒼然とした旧態依然の言語と伝説から成り立ってい
る (“red” という color imagery が象徴する) かぎり、the son-artist として
の Stephen はそれを飛び越え、自己の imagination から生れ出る芸術 (“green”
imagery が象徴する) を創造しなければならない。 “*the green was possessed*”

とは「the green にとりつかれた Stephen」を暗示しているのではあるまいか？

When the soul of a man is born in this country there are nets flung at it to hold it back from flight. You talk to me of nationality, language, religion. I shall try to fly by those nets. 10

音韻による analogy からの言葉の創造は、聴覚を通して、それが自己の内面の情緒に与える意義に快を覚えるという Stephen の次の言葉によって明白である。

Words. Was it their colours? He allowed them to glow and fade, hue after hue: sunrise gold, the russet and green of apple orchards, azure of waves, the grey-fringed fleece of clouds. No, it was not their colours: it was the poise and balance of the period itself. Did he then love the rhythmic rise and fall of words better than their associations of legend and colour? Or was it that, being as weak of sight as he was shy of mind, he drew less pleasure from the reflection of the glowing sensible world through the prism of a language many-coloured and richly storied than from the contemplation of an inner world of individual emotions mirrored perfectly in a lucid supple periodic prose? 11

この“the red rose”と“the green rose”の imagery は、Clongowes 校での算数の時間にひきつがれる。

Stephen tried his best, but the sum was too hard and he felt confused. The little silk badge with the white rose on it that was pinned on the breast of his jacket began to flutter. He was not good at sums, but he tried his best so that York might not lose. Father Arnall's face looked very black, but he was not in a wax: he was laughing. Then Jack Lawton cracked his fingers and Father Arnall looked at his copybook and said:

Right. Bravo Lancaster! The red rose wins. Come on now, York, ! Forge ahead!

Jack Lawton looked over from his side. The little silk badge with the red rose on it looked very rich because he had a blue sailor top on it. Stephen felt his own face red too, thinking of all the bets about who would get first place in elements, Jack Lawton or he. Some weeks Jack Lawton got the card for the first and some weeks he got the card for the first. His white silk badge fluttered and fluttered as he worked at the next sum and Father Arnall's voice. Then all his eagerness passed away and he felt

his face quite cool. He thought his face must be white because he felt so cool. He could not get out the answer for the sum but it did not matter. White roses and red roses: those were beautiful colours to think of. And the cards for first place and second place and third place were beautiful colours too: pink and cream and lavender. Lavender and cream and pink roses were beautiful to think of. Perhaps a wild rose might be like those colours and he remembered the song about the wild rose blossoms on the little green place. But you could not have a green rose. But perhaps somewhere in the world you could. 12

Stephen の rival である Jack Lawton の着けている“the red rose”は Father Arnall の賞讃を浴び、Jack Lawton-Father Arnall 側の勝利、つまりアイルランドの reality が Stephen の imagination を脅かしているようである。“Father Arnall’s face looked very black,…”は冒頭における父の“a hairy face”と結びついて、父の maturity がそれを凌駕せんとする the son-artist である Stephen を脅かしているようである。Stephen が着けている“the white rose”は彼の immaturity と Jack Lawton-Father Arnall が代表するアイルランドの reality に対する恐怖感をあらわしている。それは“flutter”という動詞のくりかえしによって強調されている。結局 Stephen が求めているものは、とりもなおさず imagination の世界であることが“But you could not have a green rose. But perhaps somewhere in the world you could.”によって明白である。

この green-red の color imagery は短篇集 *Dubliners* 中の一編 *The Sisters* においても強力な印象と意味を与えている。

It was always I who emptied the packet into his black sniff-box for his hands trembled too much to allow him to do this without spilling half the snuff about the floor. Even as he raised his large trembling hand to his nose little clouds of smoke dribbled through his fingers over the front of his coat. It may have been these constant showers of snuff which gave his ancient priestly garments their green faded look for the red handkerchief, blackened, as it always was, with the snuff-stains of a week, with which he tried to brush away the fallen grains, was quite inefficacious. 13

蒼然と色褪せた green の僧衣と黒ずんだ役にたたない the red handkerchief—これは父のいない少年が精神的な父と抑ぐ a Catholic Father の、も早や imag-

inative power と creative power を失った姿である。Dubliners の各短篇がアイ
イルランドの肉体的、精神的 paralysis をテーマにしたものであることから、
the son-artist としての Stephen の、creative fathers に対する希望の喪失が
うかがえるのである。

[3] A Portrait, Chapter 1, Section 1, line 13~20

When you wet the bed first it is warm then it gets cold. His
mother put on the oilsheet. That had the queer smell.

His mother had a nicer smell than his father. She played on
the piano the sailor's hornpipe for him to dance. He danced:

*Tralala lala,
Tralala trallady,
Tralala lala,
Tralala lala.* 14

この部分で Stephen の情緒反応は父から母へと移る。Stephen の放尿は、父の
権威に対する極度の緊張があったことをあらわしているようである。この “water”
imagery が恐しい父の image とやさしい母の image の間にいることに注目した
い。ここで重要なのは “warm and cold” imagery である。Stephen の情緒の世
界では coldness は whiteness, paleness, dampness と結びついて、権威者で
あり成長を抑制する父と、その父に寵愛される無抵抗主義者である Stephen の仲間の
image を暗示している。たとえば生徒監の手は、冷たくて、しめっばい。

he [Stephen] felt his forehead warm and damp against the
prefect's cold damp hand. That was the way a rat felt, slimy
and damp and cold. 15

Stephen は罰棒を受ける時の痛みを想像して “it made shivery to think of
it and cold.” 16 と感ずる。a flogger である Mr. Gleeson の手は “clean
white wrists and fattish white hands” 17 である。Clongowes 校のかつての
城主 (a marshal) の亡霊の姿は、 “He wore the white cloak of a marshal;
his face was pale and strange” 18 である。Stephen が眼鏡をこわしたために
不当の罰棒を加える Father Dolan の姿は—— “Father Dolan's white-grey
not young face, his baldry white-grey head with bluff at the side of it,
the steel rims of his spectacles and his non-coloured eyes looking

through the glasses.” 19 である。Stephen が Father Dolan の不当の罰について直訴する Clongowes 校の校長 Father Conmee の手は “a cool moist palm” 20 である。これら Stephen にとって Fathers である人々のもつ paleness-whiteness-dampness の imagery は彼らが住む環境 (reality) にもつながっている。Clongowes 校の夕方の空気は “pale and chilly” 21 であり、空は “pale and cold” 22 である。Clongowes 校の食堂の描写は——

He sat looking at the two prints of butter on his plate but could not eat the damp bread. The tablecloth was damp and limp. But he drank off the hot weak tea which the clumsy scullion, girt with a white apron, poured into his cup. He wondered whether the scullion's apron was damp too or whether all white things were cold and damp. Nasty Roche and Saurin drank cocoa that their people sent them in tins. They said they could not drink the tea; that it was hogwash. Their fathers were magistrates, the fellows said. 23

Clongowes 校の寮の廊下は身ぶるいのする程冷たく奇妙にしめっぽい。

And the air in the corridor chilled him too. It was queer and wettish. 24

一方、“Warm and nice” imagery は Stephen の情愛の対象者である母と結びつく。しかもこの “Warm and nice” imagery は、不快の情緒反応をよび起す “cold and damp” imagery のすぐ後に、きまって、それを打消すものとして Stephen の意識にのぼってゆく。たとえば、次のシーンはその好例である。

It would be nice to lie on the hearthrug before the fire, leaning his head upon his hands, and think on those sentences. He shivered as if he had cold slimy water next his skin. That was mean of Wells to shoulder him into the square ditch because he would not swop his little snuffbox for Wells' seasoned hacking chestnut, the conqueror of forty. How cold and slimy the water had been! A fellow had once seen a big rat jump into the scum. Mother was sitting at the fire with Dante waiting for Brigid to bring in the tea. She had her feet on the fender and her jewelly slippers were so hot and they had such a lovely warm smell! 25

引用文14の中で、“When you wet the bed first it is warm then it gets cold.” は、“Warm” and “cold” という相反する2つの imagery が並列されてい

るという点で注目に値する。Stephen は the son-artist として creative and imaginative power を失った「父」を否定し反抗してゆくが、「母」に対する情愛を最後まで捨てきれない。彼にとって「母」とは、実母 May Dedalus ばかりでなく、Eileen をはじめとする幼児時代からの女友達、それに Virgin Mary を含めた a symbolic mother である。(Stephen の母をはじめ、彼と関係のあるすべての女性が Virgin Mary の image を帯びていること、また、女性との交渉が芸術創造の衝動となっている点については、さきに挙げた梅光女学院大学英語英文学会発行の「英文学研究」第1号および第3号に掲載の拙論において詳しく述べている。) Joyce (Stephen) の母親は、深い情愛の対象であるばかりでなく、やがて彼を Catholicism に帰依する様熱心に忠告する1人となる。Stephen にとって「母」とは霊の道の支配者である Father God に対し罪の隠処としての image をもった存在であり、一方では越えてはならぬ一線を越えんばかりの incestual な愛の対象者であるが、また一方では *Ulysses* における the cold Dublin Bay が喚起する様に Fathers と同様 “cold” imagery をもつ存在となる。*Ulysses* で、母の臨終の床で祈ってやれなかった Stephen が Sandymount の海浜を歩いている時に突然海に向かって放尿をし、その暖い湯気が立ちのぼるのを郷愁をこめて眺めている場面があるが、Stephen の意識の底に幼児期の “Warm” imagery をたたえたやさしい母への郷愁があったのであろう。また、それは “Warm and cold water” が暗示する様に母に対する Stephen の ambivalent な感情をあらわしているようである。

[4] *A Portrait, Chapter 1, Section 1 line 21-26*

Uncle Charles and Dante clapped. They were older than his father and mother but uncle Charles was older than Dante.

Dante had two brushes in her press. The brush with the maroon velvet back was for Michael Davitt and the brush with the green velvet back was for Parnell. Dante gave him a cachou every time he brought her a piece of tissue paper. 26

Stephen の情緒反応はさらに分化して父から母へ、そしてここでは同居人に向けられてゆく。Dante という女性の役割は何か？ Joyce の伝記を書いている Herbert Gorman によると Joyce が6才の時に Joyce 家にやって来た女家庭教師 Mrs. Conway がそのモデルらしい。彼女が Joyce 家にやって来た前後の事情と彼女の性格が次の様に記せられている。

Bray's only importance to the life of James Joyce rests in the fact that it was here, he achieved the observant faculties of a naturally-curious boy and it was from here that he first went to school. Unreasoning infancy was left behind at Bray. It was here, too, that the weakness of his eyes became manifest, and glasses, that shameful curse of the small lad, were forced upon him. It was here, again, that the fanatically-bigoted Mrs. Conway came to live with the Joyce family and the boy observed with some interest her lamp of culza oil before the statue of the Immaculate Conception, her green and maroon brushes named for Charles Stewart Parnell and Michael Davitt and her vague attempts to teach him where the Mozambique Channel was and which was the longest river in America. Mrs. Conway, forever famous as the Dante of *A Portrait of the Artist as a Young Man* and the Mrs. Riordan of *Ulysses*, was originally a Miss Hearn from Cork. She had entered a convent in her youth but had ventured back into the world before she had taken her final vows. Being blessed with an excellent income it was not long before an almost painfully polite Mr. Conway cast an admiring eye upon her and persuaded her into matrimony. For some time life proceeded in an auspicious manner. Mr. Conway was punctilious in his attentions and always insisted that Mrs. Conway, lulled, of course, into a purring security, take the choicest morsels at dinner before any other lady was seated. Then one day Mr. Conway abruptly disappeared and with him disappeared Mrs. Conway's money. The result was a fiercely-religious bitter-minded woman forever suspicious of men and intolerent of all departures from the Roman Catholic moral code for middle-class families. Mrs. Conway came to the Joyce family in the early autumn of 1888 as a sort of original governess to James Augustine but by that time John Stanislaus had decided what to do with his eldest son. He would send him to the best Jesuit school for boys in the island. 27

自分を裏切った中産階級出身の男に対する怨念が同じ中産階級の家庭の長男に向けられその catholic 信仰が狂信的となり、その教育が偏執的になっていったことはまちがいない。後の Christmas scene における宗教と政治論争でも分る様に Dante が熱狂的な Catholic Fathers 支持者であり、彼らが弾劾したアイルランド自治運動の頭首 Parnell に対する彼女の罵倒もうなづけるのである。Dante が持っている2つのブラシ “the brush with the maroon velvet back for Michael Davitt”

と “the brush with the green velvet back for Parnell” は先程の “green rose” と “red rose” と重なりあっている。Dante はやがて Parnell に捧げた the green velvet back をはぎとってしまうが、ここにも Catholic Fathers に牛耳られたアイルランドの reality への conformist たる Dante の役割と、それに対立する Stephen 自身の imagination の世界 (“green” imagery が象徴) の衝突がある。Stephen と Parnell は、ともにアイルランド市民、Catholic Fathers による裏切りによる失脚を予期されているという点で、その運命を共有している。

(“betrayal” は Joyce 文学の重要な背景となっており、これについては、梅光女学院大学英語英文学会発行「英文学研究第2号」中に掲載の拙論『Joyce と Ibsen—その精神的葛藤—』において詳述してある。) 引用26の中で “Dante gave him a cachou every time he brought her a piece of tissue paper” の部分に注目したい。これは a reward for conformity をあらわしているようである。

さらに音韻による analogy を促すものとして “tissue” と “cachou” がある。“tissue” は “complicated series, set, network or web, of false words or things” という意味があり、“cachou” が口の臭味を消す薬用菓子ということから、Stephen が飛び超えんとするアイルランドの3つの net (引用10に挙げた、とくに language) への揶揄がこめられているようである。

[5] *A Portrait, Chapter 1, Section 1, p8 line 1-15*

The Vances lived in number seven. They had a different father and mother. They were Eileen's father and mother. When they weve grown up he was going to marry Eileen. He hid under the table.

His mother said:

—O, Stephen will apologize.

Dante said:

—O, if not, the eagles will come and pull out his eyes.

Pull out his eyes,

Apologize,

Apologize,

Pull out his eyes.

Apologize,

Pull out his eyes,

Pull out his eyes,

Apologize. 28

“The Vances lived in number seven. They had a different father and mother” という箇所は、少年の奇妙な innocence がでている。第2文中の “They” は、Stephen が “The Vances” を何かある種族のようなものと考え、“father and mother” を種族の長と考えていることを暗示している。Stephen には夫と妻という sexual な家族の仕組が分っていないようであり、やがては Eileen と結婚するという彼の宣言も、彼にとってはその意味が殆ど分らないままなされていることをものがたっている。しかしながら、彼の Protestant の娘 Eileen との結婚宣言があると、突然母と Dante が早く謝る様彼を説得する。何者かの怒りが Stephen に注がれているわけだが、Stephen を襲う者とは誰のことか？ まな何故 Stephen は謝らなければならないのか？ Stephen を脅迫する者とは、やはり広い意味で a symbolic father ではなかろうか？ Eileen が Protestant であることは Protestant ぎらいの Dante ばかりでなく、彼女が帰依する Catholic Fathers の怒りをかうことはまちがいない。しかしそれ以上にこの “marriage” という言葉が暗示しているように、the son-artist の maturity, sexuality の成長に対する a symbolic father の嫉妬と逆襲があらわされているようである。またこれは Virgin Mary の image を共通に備えた Eileen をはじめとする女性（母を含む）との incestual で sinful な情愛の衝動がアイルランドの霊の道に反する肉の道にもとづいた芸術創造の衝動に変貌することに対する「父」の怒りをあらわしているようでもある。“the eagle” は何の象徴かという点については、精神分析の立場から、先に挙げた2つの拙稿（「英文学研究」第1号、および第3号）に詳述している如く、Oedipus Complex に陥っている息子の夢にしばしばあらわれる〈父親恐怖〉の象徴であり、やはり「父」（God, Catholic Fathers, Simon Dedalus）を示しているといえよう。

“Pull out his eyes. . . .” の箇所は、単なる Jingle と解するよりは、もっと大きな意味がかくされているようである。私はこの箇所の出典が旧約聖書の中にあると考えている。1つは、旧約聖書「箴言」の第30章、もう1つは「ヨブ記」17章である。この2つの聖書の箇所と、Joyce の the father-son conflict との関係を考えてみたい。

(1) 旧約聖書「箴言」第30章 1節～17節。

30 Sayings of Agur son of Jakeh from Massa:

1 This is the great man's very word: I am weary, O God,
I am weary and worn out;

- 2 I am a dumb brute, scarcely a man,
without a man's powers of understanding;
- 3 I have not learnt wisdom
nor have I received knowledge from the Holy One.
- 4 Who has ever gone up to heaven and come down again?
Who has cupped the wind in the hollow of his hands?
Who has bound up the waters in the fold of his garment?
Who has fixed the boundaries of the earth?
What is his name or his son's name, if you know it?
- 5 God's every promise has stood the test:
he is a shield to all who seek refuge with him.
- 6 Add nothing to his words,
or he will expose you for a liar.
- 7 Two things I ask of thee;
do not withhold them from me before I die.
- 8 Put fraud and lying far from me;
give me neither poverty nor wealth,
provide me only with the food I need.
- 9 If I have too much, I shall deny thee
and say, 'Who is the LORD?'
If I am reduced to poverty, I shall steal
and blacken the name of my God.
- 10 Never disparage a slave to his master,
or he will speak ill of you, and you will pay for it.
- 11 There is a sort of people who defame their fathers
and do not speak well of their own mothers;
- 12 a sort who are pure in their own eyes
and yet are not cleansed of their filth;
- 13 a sort-how haughty are their looks,
how disdainful their glances!
- 14 A sort whose teeth are swords,
their jaws are set with knives,
they eat the wretched out of the country
and the needy out of house and home.
- 15 The leech has two daughters;
'Give', says one, and 'Give', says the other.
Three things there are which will never be satisfied.
four which never say, 'Enough!'
- 16 The grave and a barren womb.

a land thirsty for water
and fire that never says, 'Enough!'

- 17 The eye that mocks a father or scorns a mother's old age
will be plucked out by magpies
or eaten by the vulture's young. 29

1節より6節までは、Creatorである父(神)の絶対的真理(知恵)の力の指摘と、息子(Agur=人間)は父のcreativityを我がものとするまでmatureしてゆくことが不可能であるということが強調されている。Agurは自分は知恵を知らないと告白する。さらに彼は誰が知恵を知っているのかも知らないという。辛辣な皮肉でもって彼は他の人々は恐らく知恵を地上にもたらした人物を知っていると指摘する。しかし彼は知らない!これは、人は自分自身の実存についての真理を発見することができるということを疑う懐疑家の言葉である。人は天に嵐を起し、神を引きおろすことはできない、と彼はいう。創造者のみがそのことを成すことができる。

(4節) さらに彼は神が知恵を啓示することによって御自身を知らせるということを認めない。われわれはこの見方が神の知恵が人々を求め招くために来るという見方と根本的に違うということを直ちに理解する。それは人間が神と神の知恵を発見することができないというヨブ記28章の見解に通ずる。そしてそれはまた神がその道を人間に完全にはもらさないと「伝道の書」に顕著な見解にも通ずる。5節~6節は、父(神)の曲げることのできない道と性格を厳しく思い出させる言葉によって始められる。人(息子)は神(父)の言葉に何かをつけ加えることによって神を変えることはできない。7節から10節までは〈2つのこと〉が求められる。それは、うそ、偽りを遠ざけること、貪しくもなく、富みもしないことであるが、後者のみが展開される。11節から14節には〈者がある〉が4回くりかえされ、息子の仙る4つの悪の道が挙げられている。孝行心の欠如(11節)、自己義認(12節)、高慢(13節)、そして残忍な言葉と行動(14節)がそれである。次に、欲求不満の4つの例が、15節~16節に示されている。陰府、不妊の胎、水にかわく地、そして火、これらのものは人の力を消化してしまうが、彼には何の返礼をも返さない。この中で特に強調されているものはsexualな肉欲の不満である。そして17節では(下線部)、再び父と母に対する反逆とその罰が示されている。この箇所はDuay Versionでは“The eye that mocketh at his father and that despiseth the labor of his mother in bearing him, let the raven of the brooks pick it out, and the young eagles eat it.”となっている。この部分がA PortraitのChapter 1, Section 1の最

後の部分(引用28)の出典ではなかろうか、この聖書の箇所には記されている息子の父に対する反逆、その4つの悪の道は、Stephen が仙る罪の道の全てをあらわしており、とくに sexuality に関係のある肉欲の道が Stephen の芸術創造への衝動でありこの肉欲の道が、聖書の中で強調されていることは意義深い。そして全ての悪の道(とくに肉欲の道)が父母に対する反逆の道に総合され、その戒めが2度言及され、その罰が the eagles に関係していることは意義深い。A Portrait における Stephen が犯した売笑婦との唯一度の姦淫の罪は他の全ての罪につながっていくことになる。

(2) 「ヨブ記」17章

- 1 My mind is distraught, my days are numbered,
and the grave is waiting for me,
- 2 Wherever I turn, men taunt me,
and my day is darkened by their sneers.
- 3 Be thou my surety with thyself,
for who else can pledge himself for me?
- 4 Thou wilt not let those men triumph,
whose minds thou hast sunk in ignorance;
- 5 if such a man denounces his friends to their ruin,
his sons'eyes shall grow dim.
- 6 I am held up as a byword in every land,
a portent for all to see;
- 7 my eyes are dim with grief,
my limbs wasted to a shadow.
- 8 Honest men are bewildered at this,
and the innocent are indignant at my plight.
- 9 In spite of all, the righteous man maintains his course,
and he whose hands are clean grows strong again.
- 10 But come on, one and all, try again!
I shall not find a wise man among you.
- 11 My days die away like an echo;
my heart-strings are snapped.
- 12 Day is turned into night,
and morning light is darkened before me.
- 13 If I measure Sheol for my house,
If I spread my couch in the darkness,

- 14 if I call the grave my father
and the worm my mother or my sister,
15 where, then, will my hope be,
and who will take account of my piety?
16 I cannot take them down to Sheol with me,
nor can they descend with me into the earth. 30

ヨブ(息子)を苦しめる暴虐な神(父)は、真正正義の神ではなく、正義真実の神は他に厳然として実在し給うに違いないというヨブの心境があらわれている。これは彼が善悪2神の実在を認めたことではなく、たとい彼の災禍苦難は残忍なる神の所為のように思われても、決して正義真実の神の所為ではありえない。真正正義の神は、やがて彼の困難に同情して彼の無罪を弁明されるにちがいない、という確信のあらわれに外ならない。ただ実際において、ヨブの心には現に彼を悩ましてるように思われる神と、将来彼の無罪を証明してくれる正義真実の神との、神に関する二重の思想が入りまじっていることは認めねばならない。そしてヨブは今や苦悩のあまり彼を苦しめる残忍な神を去り、正義真実の神に向って、その義と愛とに訴えたのである。しかし、そのヨブの生命は今やまさに風前の燈という状態にあり、彼の無罪を保証する神への願い、希望も断ち切られて、陰府に横たわることを唯一の期待としている。陰府は先に引用した「箴言」30章(引用文29)にもあった如く、霊の道に対する貪欲な肉欲の道を暗示しているようである。それは神の知恵を与えず、何らお返しをしない世界である。さてこの「ヨブ記」17章の5節～7節(引用文30)はRSV(Revised Standard Version)では次のようになっている。

- 5節 — He who informs against his friends to get a share of their property the eyes of his children will fail.
6節 — He has made me a byword of the peoples, and I am one before whom men spit.
7節 — My eye has grown dim from grief, and all my members are like a shadow.

5節は、友人達が神にへつらって何らか分け前を獲得しようと自分を裏切る卑しさをヨブが糾弾しているようにとれる。この「裏切り」(betrayal)は *A Portrait* で重要なモチーフとなっており、特に Stephen と Parnell を結びつけるのは Catholic Fathers による裏切りである。6節の“spit”は、ドイツ訳では“pfui”(ペット唾をばくこと)で、その感じがよくあらわれている。この5節～7節は *A Portrait*

の Christmas scene における Parnell 派と Catholic Fathers 派との論争に関係してくるとおもわれる。例えば次の引用は、この聖書の箇所のパロディではないかと思う。

Mr Casey opened his eyes, sighed and went on:

—It was down in Arklow one day. We were down there at a meeting and after the meeting was over we had to make our way to the railway station through the crowd. Such booing and baaing, man, you never heard. They called us all the names in the world. Well there was one old lady, and a drunken old harridan she was surely, that paid all her attention to me. She kept dancing along beside me in the mud bawling and screaming into my face:

Priest-hunter! The Paris Funds! Mr Fox! Kitty O'Shea!

—And what did you do, John? asked Mr Dedalus.

—I let her bawl away, said Mr Casey. It was a cold day and to keep up my heart I had (saving your presence, ma'am) a quid of Tullamore in my mouth and sure I couldn't say a word in any case because my mouth was full of tobacco juice.

—Well, John?

—Well. I let her bawl away, to her heart's content, *Kitty O'Shea* and the rest of it till at last she called that lady a name that I won't sully this Christmas board nor your ears, ma'am, nor my own lips by repeating.

He paused. Mr Dedalus, lifting his head from the bone, asked:

—And what did you do, John?

—Do! said Mr Casey. She stuck her ugly old face up at me when she said it and I had my mouth full of tobacco juice. I bent down to her and *Phth!* says I to her like that.

He turned aside and made the act of spitting.

—*Phth!* says I to her like that, right into her eye.

He clapped his hand to his eye and gave a hoarse scream of pain.

—*O Jesus, Mary and Joseph!* says she. *I'm blinded! I'm blinded and drowned!*

He stopped in a fit of coughing and laughter, repeating:

—*I'm blinded entirely.*

Mr Dedalus laughed loudly and lay back in his chair while uncle Charles swayed his head to and fro.

Dante looked terribly angry and repeated while they laughed:

—Very nice! Ha! Very nice!

It was not nice about the spit in the woman's eye. 31

さてもう一度 *A Portrait* の *Chapter 1, Section 1* の最後の部分 (引用文28) にもどって, “Pull out his eyes” ではじまるこの jingle の音韻的解釈を試みてみる。この jingle をくりかえし発音してみると, とくに目立つ音は pap (father) と apple である。apple は聖書の中に多く用いられているが, 私は特に “the apple of eyes” に着眼したい。“the apple of eyes” は *A Portrait* にもしばしばあらわれるが, 例えば Christmas scene で Dante は, the apple of eyes = the apple of God's eyes = the most precious one for God = priest と解釈している。

— If we are a priest-ridden race we ought to be proud of it! They are the apple of God's eye. *Touch them not*, says Christ, for they are *the apple of my eye*. 32

the apple of eyes とは, 聖書において父なる神と Communion によって強く結び合わされた息子と解釈される。

さて, the apple of eyes があらわれる聖書の箇所は (1)「箴言」7章, 2節, (2)「詩篇」17章, 8節, (3)「申命記」32章, 10節の合計3箇所である。その一つ一つにあたって, Joyce の the father-son conflict との関聯性について考察してみよう。

(1) 「箴言」7章……賢者 (父) よりイスラエル人 (息子) への言葉

- 1 My son, keep my words,
store up my commands in your mind.
- 2 Keep my commands if you would live,
and treasure my teaching as the apple of your eye.
- 3 Wear them like a ring on your finger;
write them on the tablet of your memory.
- 4 Call Wisdom your sister,
greet Understanding as a familiar friend;
- 5 then they will save you from the adulteress,
from the loose woman with her seductive words.
- 6 I glanced out of the window of my house,
I looked down through the lattice,
- 7 and I saw along simple youths,
there amongst the boys I noticed
a lad, a foolish lad,
- 8 passing along the street, at the corner,

stepping out in the direction of her house
9 at twilight, as the day faded,
at dusk as the night grew dark;
10 suddenly a woman came to meet him,
dressed like a prostitute, full of wiles,
11 flighty and inconstant,
a woman never content to stay at home,
12 lying in wait every corner,
now in the street, now in the public squares.
13 She caught hold of him and kissed him;
brazenly she accosted him and said,
14 'I have had a sacrifice, an offering, to make
and I have paid my vows today;
15 that is why I have come out to meet you,
to watch for you and find you.
16 I have spread coverings on my bed
of coloured linen from Egypt.
17 I have sprinkled my bed with myrrh,
my clothes with aloes and cassia.
18 Come! Let us drown ourselves in pleasure,
let us spend a whole night of love;
19 for the man of the house is away,
he has gone on a long journey,
20 he has taken a bag of silver with him;
until the moon is full he will not be home.'
21 Persuasively she led him on,
she pressed him with seductive words.
22 Like a simple fool he followed her,
like an ox on its way to the slaughter-house,
like an antelope bounding into the noose,
23 like a bird hurrying into the trap;
he did not know that he was risking his life
until the arrow pierced his vitals.
24 But now, my son, listen to me,
attend to what I say.
25 Do not let your heart entice you into her ways,
do not stray down her paths;
26 many has she pierced and laid low,
and her victims are without number.

27 Her house is the entrance to Sheol,
which leads down to the halls of death. 33

この箇所は、男たちの心を得ようと求める知恵と〈みだらな女〉との間の競争についての訓話である。父（賢者）から息子（イスラエル人）への言葉は、不道德と姦淫を断罪し、それらを知恵に対する不誠実の例として用いる。即ち道楽者と背信者が同時に論じられる。愚かな女の誘惑と、彼女に耳を傾ける男たちが段々破滅に陥ってゆく有様が劇形式を利用してあらわされ、ついには若者の死へと進んでゆく。

全体として想定されていることは、——そしてそれがこの訓話の真の中心であるのだが——もし彼が知恵（霊）の道を教えられていたら、彼は自分を救うことができたであろう、ということである。神とこの世における彼の歩みとについての真の理解、すなわち知恵は人生の戦いにおいて男の唯一の楯である。4節にいわれていることは、

〈知恵と結婚せよ。かの女をおまえの花嫁として受け入れよ。〉である。何故なら、エジプトの知恵文学において〈妹〉は花嫁をあらわす用語である。次の行では、息子は知恵を彼の〈親しい友〉と呼べと命じられている。そのように訳されるヘブル語の本当の意味は〈親戚〉である。（ルツ記2章1節） 親戚とは、その保護を要求することのできる親しい身内の男子のことである。親戚が債権者に対する最善の保護者であり、よき結婚が売春に対する守りであるように、知恵は〈みだらな女〉から身を守る楯である。〈みだらな女〉は、よこしまと愚かさ、また神とその道徳的支配の否定を具象化したものである。6節からは、単純な若者がよこしまな女によって破滅する姿が劇的に描かれているが、場所の設計が今日でも東洋の町々で普通にみられる、町の一角が見渡せる格子窓を持っている。これは Joyce の *Dubliners* におけるあの少年 (*Araby* の中の) が求める女性の東洋的背景となり、*A Portrait* においては、

Stephen が探し求める「*Monte Cristo* 伯」の Mercedes との幻の出会いの場所となり、あるいは彼が誘いこまれる売春宿となり、*Ulysses* では、Stephen が酔いふれる売春宿となる。聖書のこの場面において、祝宴は女の本当の目的を伝えるための口実として用いられるにすぎない。〈見知らぬ女〉に関するこれらの訓話の解釈者の多くは、彼女をカナン人の豊饒の女神を表わすものとする。賢者たちがイスラエルの神に対する忠誠をば知恵として描き、それと対照的にこの女を背信の具象化としてくとき、彼らはひとつの特別な祭儀を心に思い浮かべていたのだと解釈者たちは主張する。彼らは、賢者たちによって攻撃された背信の一つの形として豊饒祭儀が含まれていたという見解を支持するために次のことを主張する。すなわち、16~18節に見られる〈愛〉への招きは、豊饒祭儀の儀式のひとつの特徴であった〈聖なる結婚〉に

関する叙述と類似している。いずれにせよ、ここには、豊饒祭儀の性的モチーフを含む非イスラエルの宗教儀式に対する戒めがあらわれている。

〈夫は家に居ません〉というこの女の言葉は、われわれを具体的な生きた人間の場面に連れもどす。その女は淫婦である。彼女はその夫が留守の間に娼婦のようにになっている。しかも彼女は単なる姦淫の妻以上である。彼女は、いわばその対抗者である知恵（霊）と生死をかけた闘争を行っている〈見知らぬ女〉である。そして若者は彼女の誘惑のひとりの犠牲者にすぎないのではない。彼は確かにひとりの犠牲者ではあるが、しかし生と死との決断に直面させられているすべての人の代表でもある。21節～23節は女の誘惑に屈服することに含まれる結末を強調する。この若い人は屈服し、〈あたかも牛が、ほふり場に行くように〉したがってゆく（22節）。〈それによって彼は自分の命を失うようになるであろう〉（23節）。本当の物語の一部として記述的に描くならば、これは夫が帰ってきて、その若者を——そして彼の妻であるその女を殺すことを意味する。これが若者がその命を失うかもしれないひとつの道である。しかしそれは唯一の、あるいは最も深い道ではない。われわれはここで肉体的な命だけを問題にしているのではない。さらにこれらの訓話中のこの女は、たとえその夫を欺き、自然的な死を死んだとしても、イスラエルにおけるわがままな妻がかってそうであったよりもより永続的な人間存在の側面を代表する。この女は男達を死へと招くが、自分は決して死なない！

24節～27節は、結論部であるが、賢者は再び序論にもどる。〈知恵の教えだけがあなたを守ることができる〉〈かの女の道に迷ってはならない〉（25節）。その女に〈殺された者は多い〉。その女の家は〈陰府に行く道である〉。彼女は知恵に匹敵する対立者である。知恵の〈家〉（9章1節）は命の門である。賢者はこれらのテーマを、彼らによって教えられた知恵の中に啓示されているような神に対する忠誠の比喩としたのである。そしてその反対のもの、即ち乱交と不誠実はしたがって、心の中で神はいないと言う愚か者の愚かさ（詩篇14：1）あるいは異教の祭儀へと傾く背教の比喩となるのである。

肉欲（＝性欲）が、神の知恵に対立するものであり、全ての悪の道に通ずるものであることは、*A Portrait* で Stephen が売春婦と犯した姦淫の罪が全ての罪を誘う導火線となっていることを想起させる。またこの肉の道が一死（陰府）への道に通ずるということは、先に引用したヨブ記17章と関連がある。また *A Portrait* との関連性を考えるならば、Father God-Catholic Fathers の霊（＝神の知恵）との結婚と、Stephen-Parnell の肉との結婚という対立関係が存在する。（Stephen の母、

Eileen, Virgin Mary, the harlot に対する incestual な、あるいは sinful な愛が豊饒な芸術創造へと導くように、Parnell と Mrs. O'Shea の関係は、上述の聖句にある〈みだらな女〉と〈innocent な若物〉の関係を想起させる。

(2)「詩篇」17章 …… ダビデ (息子) より神 (父) への祈願

- 1 Hear, LORD, my plea for justice,
give my cry a hearing,
listen to my prayer,
for it is innocent of all deceit.
- 2 Let judgement in my cause issue from thy lips,
let thine eyes be fixed on justice.
- 3 Thou hast tested my heart and watched me all night long;
thou hast assayed me and found in me no mind to evil.
I will not speak of the deeds of men;
I have taken good note of all thy sayings.
- 5 I have not strayed from the course of duty;
I have followed thy path and never stumbled.
- 6 I call upon thee, O God, for thou wilt answer me.
Bend down thy ear to me, listen to my words.
- 7 Show me how marvellous thy true love can be,
who with thy hand dost save
all who seek sanctuary from their enemies.
- 8 Keep me like the apple of thine eye;
hide me in the shadow of thy wings
from the wicked who obstruct me,
from deadly foes who throng round me.
- 10 They have stifled all compassion;
their mouths are full of pride;
they press me hard, now they hem me in,
on the watch to bring me to the ground.
- 12 The enemy is like a lion eager for prey,
like a young lion crouching in ambush.
- 13 Arise, LORD, meet him face to face and bring him down.
Save my life from the wicked;
- 14 make an end of them with thy sword.
With thy hand, O LORD, make an end of them;
thrust them out of this world in the prime of their life,
gorged as they are with thy good things,

blest with many sons
and leaving their children wealth in plenty,
15 But my plea is just: I shall see thy face,
and be blest with a vision of thee when I awake. 34

この箇所にも、霊の道に生きる者と肉の道に生きる者との対立がある。ダビデ（息子）から神（父）への祈願であり、霊の道（神の知恵）に従って生きているが、肉の道に従って生きる者からの誘惑を受けているから、父なる霊の力によって、この誘惑を斥けて欲しいという願いである。最後の2節（14節～15節）に2つの道（肉と霊）が並列されている。14節は肉の道に生きる者で、これまで引用した聖句にあった如く、反イスラエルの豊饒祭儀、またそれが有する性的モチーフがこの場合にも強調されている。15節は義にあって生きる者、すなわち神の霊による生涯を全うする者のことが述べられている。

下線部（8節～9節）は注目に値する。“thy wings”という言葉は Father (God) = the eagle のパターンを想起させる。また9節の “from the wicked who obstruct me, from deadly foes who throng round me” は Joyce の *Dubliners* 中の *Araby* という短篇の中にある次の場面を想起させる。

Her image accompanied me even in places the most hostile to romance. On Saturday evenings when my aunt went marketing I had to go to carry some of the parcels. We walked through the flaring streets, jostled by drunken men and bargaining women, amid the curses of labourers, the shrill litanies of shop-boys who stood on guard by the barrels of pigs' cheeks, the nasal chanting of street-singers, who sang a “come-all-you” about O'Donovan Rossa, or a ballad about the troubles in our native land. These noises converged in a single sensation of life for me: I imagined that I bore my chalice safely through a throng of foes. Her name sprang to my lips at moments in strange prayers and praises which I myself did not understand. 35

下部線のうち “a throng of foes” は上記の聖句中の言葉 “deadly foes who throng round me.” と文意、用語がよく似ている。またもう一つの下線部（引用35の）“chalice” は重要な意義をもっているようで、*Araby* の前にある短篇 *The Sisters* の中にはもう一つの “chalice” があらわれる。

“He was too scrupulous always,” she said. “The duties of the priesthood was too much for him. And then his life was, you might

say, crossed.”

“Yes,” said my aunt. “He was a disappointed man. You could see that.”.....

“It was that chalice he broke... That was the beginning of it. Of course, they say it was all right, that it contained nothing, I mean. But still... They say it was the boy’s fault. But poor James was so nervous, God be merciful to him!”

“And was that it?” said my aunt. “I heard something...”

Eliza nodded.

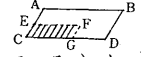
“That affected his mind,” she said. “After that he began to mope by himself, talking to no one and wandering about by himself. So one night he was wanted for to go on a call and they couldn’t find him anywhere. They looked high up and low down; and still they couldn’t see a sight of him anywhere. So then the clerk suggested to try the chapel. So then they got the keys and opened the chapel and the clerk and Father O’Rourke and another priest that was there brought in a light for to look for him... And what do you think but there he was, sitting up by himself in the dark in his confession-box, wide-awake and laughing-like softly to himself?”

She stopped suddenly as if to listen. I too listened; but there was no sound in the house: and I knew that the old priest was lying still in his coffin as we had seen him, solemn and truculent in death, an idle chalice on his breast.

Eliza resumed:

“Wide-awake and laughing-like to himself... So then, of course, when they saw that, that made them think that there was something gone wrong with him...” 36

chalice は勿論、聖体拝領の儀式に用いられるもので、キリストの血、つまりは主（神）の知恵（Logos）のはいっている大切な容器である。それをこわしてしまつた Father James Flynn は生きながら死の運命を選ばざるをえない。霊の道に進む者にとって、その霊（神の知恵）が破壊されるならば、も早や生を全うすることができない。“an idle chalice”（中身のない聖杯）を抱いたまま厳しゆくで挑戦的な表情をたたえたまま棺の中に横たわる Father Flynn — この姿を想像する父のいない少年（Father Flynn は少年にとって一種の a symbolic father）は、chalice の意義、神の知恵、霊の道に反抗する the son-artist のおもかげを有している。少年がこの短篇の冒頭で、中風の発作で死期の近づいている Father Flynn の寝室

の窓を見あげながら *paralysis* とかユークリッド幾何学にある *gnomon* という言葉とか、教義問答にでてくる *simony* といった言葉をつぶやき、その何か罪深いものに *ambivalent* な魅力をおぼえる場面があるが、*paralysis* も *gnomon* (平行四辺形の一角にできる相似形をとりのぞいた残りの部分、 の EFCG の部分をのぞく残りの部分、つまり不完全なるものを喩えている。) も *simony* もアイルランドの父なる存在が、いかに麻痺状態にあるか、いわゆる *creative power*, *imaginative power*, *sexual power* に欠けているかを示しているといえよう。*gnomon* [nóumōn] は、音韻による *analogy* から、*no man* (男性能力に欠ける者) を連想させ、*simony* が、この少年の原型とおもわれる *Stephen Dedalus* の実父 *Simon Dedalus* を連想させることは興味のあることである。

引用35は、引用36に対立する。父 (Father Flynn) を失い、はじめて独立した少年が、父の座を奪わんとする高漫な自我確立の宣言がある。そこには *a creative father* に対する *a creative son* の対決がみられる。少年からみれば、Father Flynn の “*chalice*” が空虚で麻痺状態の言葉が入っていた “*an idle chalice*” であったのに対して、少年の “*chalice*” は、Catholicism の世界からみれば、神の *grace* から *fall* することを意味する世間の汚濁、肉の道に入って、そこから学びとると同時に、それにおぼれることなく自らの中から生れ出る真に *creative* な言葉を秘めた *chalice* を意味しているといえよう。引用34の聖句の下線部 “*deadly foes who throng round me*” が肉の道への誘惑者で宗教上の敵であるのに対し、この少年の敵 “*a throng of foes*” は古い、伝統的な、意味のない陳腐な言葉を投げつける群集、つまり芸術上の敵を暗示している。それは *A Portrait* で Stephen が逃れんとする *net* (とくに *the net of language*) (引用10) のことである。

先程述べた如く父のいない少年の進む道が肉の道であることはまちがいないが、この引用箇所 (引用文35, 36) が「詩篇」の聖句にある霊の道へ導いて欲しいと願う息子の父への祈願と著しい対照をなしていることは大変重要である。

“*Araby*” とは東洋的雰囲気をもつ慈善市であるが、それが含む豊饒的、性的イメージと、少年の恋する少女に対する *Virgin Mary* に捧げる祈りにも似た祈りが、霊の道に入門しながらも *the son-artist* として肉なる者の道への誘いを断ちきれない少年の心の葛藤をあらわしているようである。

(3) 「申命記」32章1節～31節、…… モーセのイスラエル全会衆に告げる言葉

-
- 1 Give ear to what I say, O heavens,
earth, listen to my words;
- 2 my teaching shall fall like drops of rain,
my words shall distil like dew,
like fine rain upon the grass
and like the showers on young plants.
- 3 When I call aloud the name of the LORD,
you shall respond, 'Great is our God,
4 the creator whose work is perfect,
and all his ways are just,
a faithful god, who does no wrong,
righteous and true is He!'
- 5 Perverse and crooked generation
whose faults have proved you no children of his,
6 is this how you repay the LORD,
you brutish and stupid people?
Is he not your father who formed you?
Did he not make you and establish you?
- 7 Remember the days of old,
think of the generations long ago;
ask your father to recount it
and your elders to tell you the tale.
- 8 When the Most High parcelled out the nations,
when he dispersed all mankind,
he laid down the boundaries of every people
according to the number of the sons of God;
- 9 but the LORD's share was his own people,
Jacob was his allotted portion.
- 10 He found him in a desert land,
in a waste and howling void.
He protected him.
he guarded him as the apple of his eye,
- 11 as an eagle watches over its nest,
hovers above its young,
spreads its pinions and takes them up,
and carries them upon its wings.
- 12 The LORD alone led him,
no alien god at his side.
- 13 He made him ride on the heights of the earth

- and fed him on the harvest of the fields;
he satisfied him with honey from the crags
and oil from the flinty rock,
14 curds from the cattle, milk from the ewes,
the fat of lambs' kidneys,
of rams, the breed of Bashan, and of goats,
with the finest flour of wheat;
and he drank wine from the blood of the grape.
15 Jacob ate and was well fed,
Jeshurun grew fat and unruly,
he grew fat, he grew bloated and sleek.
He forsook God who made him
and dishonoured the Rock of his salvation.
16 They roused his jealousy with foreign gods
and provoked him with abominable practices.
17 They sacrificed to foreign demons that are no gods,
gods who were strangers to them;
they took up with new gods from their neighbours,
gods whom your fathers did not acknowledge.
18 You forsook the creator who begot you
and cared nothing for God who brought you to birth.
19 The LORD saw and spurned them;
his own sons and daughters provoked him.
20 'I will hide my face from them,' he said;
'let me see what their end will be,
for they are a mutinous generation,
sons who are not to be trusted.
21 They roused my jealousy with a god of no account,
with their false gods they provoked me;
so I will rouse their jealousy with a people of no account,
with a brutish nation I will provoke them.
22 For fire is kindled by my anger,
it burns to the depths of Sheol;
it devours earth and its harvest
and sets fire to the very roots of the mountains.
23 I will heap on them one disaster after another,
I will use up all my arrows on them:
24 pangs of hunger, ravages of plague,
and bitter pestilence.

- I will harry them with the fangs of wild beasts
and the poison of creatures that crawl in the dust.
- 25 The sword will make orphans in the streets
and widows in their own homes;
it will take toll of young man and maid,
of babes in arms and old men.
- 26 I had resolved to strike them down
and to destroy all memory of them,
- 27 but I feared that I should be provoked by their foes,
that their enemies would take the counsel,
and say, "It was not the LORD,
it was we who raised the hand that did this."
- 28 They are a nation that lacks good counsel,
devoid of understanding.
- 29 If only they had the wisdom to understand this
and give thought to their end!
- 30 How could one man pursue a thousand of them,
how could two put ten thousand to flight,
if their Rock had not sold them to their enemies,
if the LORD had not handed them over?
- 31 For the enemy have no Rock like ours,
in themselves they are mere fools. 37

下線部10節～11節により the eagle = the Creatorであることが明白である。12節～18節は、豊饒（即ち、性的モチーフと結びつく）が神の知恵に背く、つまり背信行為と同一視され、19節～25節は、その背信行為に対する神の怒りと人間の死が述べられ、26節以降は、人間の知恵（肉の道）が神の知恵（霊の道）にはるかに及ばないことが“Rock”の喩えによって表明されている。ここで注目すべきは、豊饒による背信行為が“foreign gods”信仰と結びついていることである。“foreign gods”とは Joyce の作品にあてはめて考えるならば、芸術上の父、つまりは、アイルランドの Catholicism における Father God, Catholic Fathers と対立する肉の道における父を暗示しているといえよう。

私は、“the apple of eyes”を含む以上3つの聖書の箇所を引用したが、それぞれが最も重要な主題は、Joyce の場合を考慮すると、(1)の「箴言」7章は sex（人間の知恵、肉の道）を、(2)の「詩篇」17章は religion（神の知恵、霊の道）を、(3)の「申命記」32章は Art を扱っているといえよう。sex-art-religion、この3つは the father-son conflict とともに、Joyce の全 lifework に根源的な問題を

投げかけたものであった。 —終—

Notes

1. Italo Svevo; quoted in P. N. Furbank, Italo Svevo: *The Man and The Writer*, University of California Press 1966, p. 121
2. James Joyce: *Ulysses*, The Modern Library, New York 1946, pp. 204~5
3. Stuart Gilbert and Richard Ellman(ed.): *Letters of James Joyce*, 3 vols, New York 1957, 1936, I, p. 312
4. Richard Ellman: *James Joyce*, Oxford University Press, New York 1965, pp. 181, 267-70, 285-86
Stanislaus Joyce: *My Brother's Keeper*, Faber and Faber, London 1958, pp. 57, 59, 60
5. James Joyce: *A Portrait of the Artist as a Young Man*, A Penguin Book with Eichosha Commentary Booklet, Eichosha, Tokyo 1971, p. 7 (下線は筆者による)
6. James Joyce: *Finnegans Wake*, the Corrected Viking Press edition, p. 260
7. John V. Keller: *The Perceptions of James Joyce*, Atlantic Monthly, 201, (March 1958), p. 85
(Also Ronald Bates: *The Correspondence of Birds to Things of the Intellect*, James Joyce Quarterly, 2, (Summer 1965), p. 287)
8. Joyce: *Ulysses*, p. 373
9. Joyce: *A Portrait*, p. 7 (下線は筆者による)
10. Ibid., p. 203
11. Ibid., p. 167
12. Ibid., p. 12 (下線は筆者による)
13. James Joyce: *Dubliners*, The Modern Library, New York, 1926, p. 11 (下線は筆者による)
14. Joyce: *A Portrait*, p. 7 (下線は筆者による)
15. Ibid., p. 22 (下線は筆者による)
16. Ibid., p. 45
17. Ibid., p. 45
18. Ibid., p. 19
19. Ibid., p. 50
20. Ibid., p. 58
21. Ibid., p. 10

-
22. Ibid., p. 10
 23. Ibid., pp. 12-13 (下線は筆者による)
 24. Ibid., p. 11
 25. Ibid., pp. 10-11 (下線は筆者による)
 26. Ibid., p. 7 (下線は筆者による)
 27. Herbert Gorman: *James Joyce-a definitive biography*, John Lane The Badley Head, London 1960, pp. 20~22 (下線は筆者による)
 28. *Joyce: A Portrait*, p. 8
 29. *The New English Bible*, Oxford University Press and Cambridge University Press, 1970, *Proverbs* 30: 1~17 (下線は筆者による)
 30. Ibid., *Job* 17 (下線は筆者による)
 31. *Joyce: A Portrait*, pp. 36-7 (下線は筆者による)
 32. Ibid., p. 38 (下線は筆者による)
 33. *The New English Bible*, *Proverbs* 7 (下線は筆者による)
 34. Ibid., *Psalms* 17: 1~15 (下線は筆者による)
 35. *Joyce: Dubliners, Araby*, p. 35 (下線は筆者による)
 36. *Joyce: Ibid.*, *The Sisters*, pp. 18-19 (下線は筆者による)
 37. *The New English Bible*, *Deuteronomy* 32: 1~31 (下線は筆者による)

Bibliography

1. Bates, Ronald: *The Correspondence of Birds to Thing of the Intellect*, *James Joyce Quarterly*, 2, Summer 1965
2. Ellman, Richard: *James Joyce*, Oxford University Press, New York 1965
3. Gilbert, Stuart and Ellman, Richard (ed.) : *Letters of James Joyce*, 3vols, New York 1957
4. Gorman, Herbert: *James Joyce-a definitive biography*, John Lane The Badley Head, London 1960
5. Joyce, James: *Dubliners*, The Modern Library, New York 1926
6. Joyce, James: *A Portrait of the Artist as a Young Man*, A Penguin Book With Eichosha Commentary Booklet, Eichosha, Tokyo 1971
7. Joyce, James: *Ulysses*, The Modern Library, New York 1946
8. Joyce, James: *Finnegans Wake*, the corrected Viking Press edition

9. Joyce, Stanislaus : *My Brother's Keeper*, Faber and Faber, London 1958
10. Keller, John V. : *The Perception of James Joyce*, *Atlantic Monthly*, 201, March 1958
11. Svevo, Italo ; quoted in P. N. Furbank, Italo Svevo : *The Man and The Writer*, University of California Press 1966
12. *The New English Bible*, Oxford University Press and Cambridge University Press 1970
13. J. C. リラーズダム著・松浦大・木ノ脇悦郎共訳「聖書講解全集10 一箴言, 伝道の書, 雅歌一」日本基督教団出版局, 東京 1971
14. 浅野順一著, 「ヨブ記註解Ⅱ」創文社, 東京, 1968